だが同時に、初歩的レベルの参加者がどうしても多くなり、基礎レベルのクラスの人数が多くなる傾向があるのは、これまでの実例からいって否定しがたいことである。基本的に１クラスの最大人員は８名と考えてきたが、この線を今後も守りながら質の高い研修ができるように、学生たちに積極的参加を促していきたい。

幸い、聖公会大学の側でも独自のテキストを編成し、組織を拡充して2007年度後半からは、短期研修だけでなく、平常時からアジア圏の学習者を受け入れ、教育を実施するようになっている。受入先機関と協力しつつ、ともに海外研修を発展させていきたい。

末尾ながら聖公会大学およびカナタ韓国語学院のこれまでご協力くださった皆様に心から感謝申し上げたい。

いしざか　こういち
（本学経済学部准教授）

2007年夏の朝鮮語海外言語文化研修

文　珍瑛

毎年、春と夏休みに行われている語学研修に、昨年夏に初めて参加することになった。８月４日、成田空港で待ち合わせをして、一行は韓国行きの飛行機に乗った。学生たちのわくわくしている気持ちが私にも伝わり、いつも利用している空港がまた違う感じがした。韓国の空港には、聖公会大学の方が迎えに来てくれた。毎回の語学研修に学生を引率している石坂先生がすべてを用意してくれたので、学生たちと無事に宿泊先に着くことができた。宿泊先は聖公会大学の寮で、学校の近くにあるマンションだった。約２週間の滞在には何の不便もなく過ごすことができるようにすべてが備えられてあった。

授業は、聖公会大学のアジア言語文化センターで行われた。今度は桃山学院大学の学生も参加したので、クラスは入門、初級、中級に分かれて、ベテランの先生たちが担当した。授業はすべて韓国語で行われ、学生たちが集中して先生の話を聞こうとする様子を見ることができた。授業のほか、韓国文化の紹介、韓国の学生との交流会、そして学生たちが直接韓国文化を体験できる時間もあった。

休日には、文化見学で遺跡を見に行き、楽しく学んでいる学生の様子を身近く見ることができた。また、学生と映画を見に行ったり、博物館を見学したりする時間もあった。そのとき見た映画は、1980年の「光州民衆抗争」を素材にした映画であったため、映画を見た後、学生と韓国の歴史について自然に話をすることができて、意味のある時間だったと思う。何より学生たち

には教室の中での授業だけではなく韓国社会の中で、韓国人と接したり、見たりすることすべてが学習であることを実感した。

すべての日程を無事に終え、8月21日日本に戻った。成田空港に着き、みな別れを惜しむような気がした。語学研修の後、参加した学生たちは以前より韓国・韓国文化について一層関心を示しており、学習にも力が入っているように感じられる。

今度の研修で、外国語の授業は学生たちが関心を持ち続けるように文化的な面など多様な側面から工夫する必要があることをもう一度確認した。また、このような体験をもっと多くの学生ができることを期待する。

むん　ちにょん
（本学ランゲージ・センター教育講師）